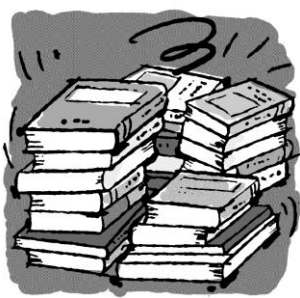


十二月のテーマ 捨てる

トラブルの活用

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所二代目理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九）のことは掲載しません。



え・城谷俊也

どのような家庭でも、また職場でもトラブルというものはあると思う。とるにたらぬ、いざこざ的なトラブルもあれば、断絶を招くような、また進退に関わるような大きなトラブルもあることであろう。

トラブルさえなければよいのと思うこともあるだろう。理想論では、なくて済ませたいと願うが、現実には、衝突や争いが、様々の形でいつも起こっているといつても言い過ぎではなからう。

ところで、このトラブルというのは、実際は尊いものではなからうか。トラブルとは対立である。意見が合わないとか、利害関係の相違が障壁をなしているとか、要するにある状態とそれに反対する状態との対立である。

対立状態そのものは、よいこととは言えないかもしれない。しかしそれが真に解決すると、必ず前進があり、建設的な飛躍もみられるのである。そしてまた、対立状態が融けたときには、そこに一種の清々しさが残り、具体的にも解

決策が見出せることが多い。そういう意味で、対立のプラス面をみると、トラブルも尊いということになるのである。

問題はトラブルをいかに解決し、建設的なものを生み出すかにある。中には、解決の難しいものもあるであろうが、原則としては、つとめて私的感情を捨て、冷静に相手の立場や考えなどを理解しようとする姿勢を貫くことである。自分だけの利益のために、一方的に意見を押しつけたのでは、絶対に解決はしない。

極端な言い方にも聞こえようが、簡単に言うところ「自分を捨てる」という方向で、トラブルの解決に臨むことだ。「捨てる」とは、私的感情や自分だけの利益などに囚われる気持ちを捨てるという意味である。これが、なかなか実行されていない。というよりも、この「捨てる」という姿勢を初めから持とうとしないのが現実の姿であるらしい。「捨てる」と負ける」と誤解している向きもあるらしい。

自分の利益を捨てるのは、後退

でもあり、負けではないかとも思いやすい。しかしながら、実際には負けにはならない。もちろん言うべきは言い、筋を通すべきは堂々として通さねばならない。それもせずに泣き寝入りせよというのではない。

要するに、たんなる利己主義、つまり我利我利は結局通らないのだという、人生の法則だけは、古今東西にわたって変わることがないということ、肚の中にたたきこんでおく必要があるということなのである。トラブルの大きなもの、たとえばストライキの類でも、一方がこのガリガリをおし通そうとすると、世間は決して味方になつてくれない。結局自滅する道しかないのである。

トラブルが起こったら、そしてそれが自分の問題であつたら、逃避せず、このガリガリを捨てる気持ちを深く持ち、努めて冷静に、私的感情を捨てて臨むことだ。そしてトラブルを全体のプラスになるように解決していくことだ。

（単行本『繁栄の法則』より）